

# たんにしょう 『歎異抄』のおはなし②

前回は、『歎異抄』の全体的な解説と、「前序」(総序)を拝読しました。

『歎異抄』は親鸞聖人が書かれたものではなく、親鸞聖人をじかに知る面授(直接口伝に師から教えを授けられること)のお弟子さんの一人であった唯円という人が書いた「聞き書き」の書物であること、そして『歎異抄』には、唯円が直接聞いた親鸞聖人のお言葉と、当時はびこっていた異端への批判が書かれていることなどをお話ししました。

「前序」には、『歎異抄』が書かれた理由が述べられており、親鸞聖人が語った言葉とは違う説が出てきたことを歎き、間違いを正して真実の教えを説くために、この書が記されたことが書かれています。

今日は『歎異抄』の第一条です。前回の「前序」はすべて漢文で書かれていましたが、第一条以後は漢字とカタカナが混じった文章になっています。

## 【第一条】

① 「一 弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。」

誓願：阿弥陀仏がまだ法蔵菩薩だった時にたてられた、生きとし生けるすべてのものを苦しみから救いたいという願い。成就しなければ仏にならないという誓いであるため、誓願という。本願のこと。

不思議：凡夫の知恵ではとらえ難い、人間の知恵をはるかに超えた、我々の思いを超えた。

往生：阿弥陀仏の浄土に往き仏に生まれ変わる事。また、信心を得て正定聚(浄土に往生すること)が定まること)の位に至ること。

摂取不捨：阿弥陀仏がすべての人々を光明の中に摂め取って決して捨てないこと。

## (現代語訳)

一 すべての人々を救うという阿弥陀仏の誓願の、人知を超えた不可思議なはたらきにお救いいただいて、きっと極楽浄土に往生できると信じて、念仏を称えようというところがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その無限の光明の中に摂め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。

この部分は、浄土真宗の教えの<sup>かなめ</sup>要をコンパクトに一言で言い表した言葉といえます。

阿弥陀仏の本願の働き、その究極の意義を明らかにしています。

そしてこの第一条では、『歎異抄』全体に関わる統一テーマのようなものが述べられています。

ですから全体としては、阿弥陀仏の誓願すなわち本願を信じることと、念仏について一貫して書かれているといえます。

本願が教えの中心、要であり、念仏はその具体的な現われです。

阿弥陀仏の誓願すなわち誓いや願い、本願は、「すべての人々を苦しみから必ず救いたい」というものです。

これは『大無量寿経』<sup>だいむりょうじゅきょう</sup>という経典に出ています。四十八あるその誓願のうちの第十八番目、「浄土に生まれたいと願って念仏する人を必ず救います」という第十八願、別名「念仏往生の願」によって、すべての人々は浄土へ生まれることができるというわけです。

そしてこの本願は、この私の上、そして皆さんの上にも働いています。

「誓願不思議」という言葉が出てきますが、これは「不思議な誓願」という意味ではなく、「弥陀の誓いが人の思いを超えている」という意味です。不思議は不可思議のことで、思議することができない、思いを超えた、ということです。

私たちがこの世に生きているということ自体、ある意味では不可思議な、私たちの思いを超えたことだといえるでしょう。

私たちは、人間の思いを超えた何ものかによって、不思議にも生かされているのです。

それは理詰めを考えてわかるようなものではなく、人間のはからいを超えた力、万物を生かしたいという意思や願いが働いているといえます。

昔の人は、こうした願い、すべての人が平等に幸せであってほしいという願いのことを、阿弥陀仏の本願というふうに表現されたのだと思います。

そうした自分自身を超えた偉大なものへの思いが、信心だといえるでしょう。

「往生をとげる」ということは、死んで極楽浄土で仏様に生まれ変わることでありますが、これはまた本当に救われるということでもあります。

煩悩の奴隷になって生活している状態から解放されて、煩悩を持ちながらも煩悩に支配されない自

由な境涯になることだといえるでしょう。

この境地を「しょうじょうじゅ正定聚」、すなわち浄土にまさしく往生することが定まった位といいます。

生きている間に仏となることが定まることです。

ですから、私たちの思いを超えた本願のはたらきに助けられて、本当に私たち一人一人が救われることが「往生」です。

そしてここでは、お念仏でも称えてみようかという心が起こったその時点で、お念仏を称えないうちに、もうすでに救われているというのです。

これは念仏する必要がないというのではなく、称えようと思う心の根底にある「信心」が、私たちを救い取ってくださるということです。

信心というのは、自分で起こすものではなく、じねん自然に起こるものです。

仏様が、悩み苦しんでいる人々に向けられた大慈悲心、すなわちすべての人が幸せになってほしいという願いが本願ですから、これに触れた時に、人々の心に感動が起こります。

本当のお念仏というのは、「念仏を申してみようと思いつ心」ですから、信心が念仏の核心です。

信心なくして、念仏はありません。

そして冒頭の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんと思ひたつところのおこる」ということが、「信心」が起こるということです。

せつしゅふしや摂取不捨は、このわたくしを救い取って捨てない、必ず救いとるという強い救済意思です。

阿弥陀仏に背を向けて逃げようとする者をどこまでも追いかけていってとらえて、ひとたびとらえると決して見捨てない、ということだと親鸞聖人は言っておられます。

「阿弥陀」という言葉は、「限りがない」という意味のサンスクリット語 (amita) が元になっています。

人間の願いには終わりがありますが、阿弥陀如来の願いは尽きることがないのです。

仏さまの世界にだけ存在する尽きることのない願いのことを、弥陀の本願というわけです。

実際には、願いがまず先にあって、願いによって私たちが生かされているという現実があり、その願いの元を阿弥陀、尽きざるもの、本願とか誓願というように後から呼んだのだと思います。

前回申しましたように、『歎異抄』の第一条は、後の第十一条に対応しています。

第十一条は、いずれ詳しくお話ししますが、「誓願不思議」と「名号不思議」すなわち「信心」にかたよった異端と、「行」すなわち念仏に偏った異端についてです。

信心さえしっかりしていれば、念仏など称える必要もなく、善根功德を積む必要もないというものと、念仏を称えても、やはり道徳的で品行方正で、真面目に努力しなければ本当は救われないと考えるものです。

信じて救われるのか、行じて救われるのか。これは宗教にとってある意味永遠の問題です。

信じるだけで何もしなかったならば、その人は救われたいのではないか。

私たちは念仏を称えて真面目な心で努力精進しなければ救われたいのではないか。

この「信」と「行」とは、あらゆる宗教を实践する人にとって大切な要素で、異義・異端の問題もこの両者の関係に終始します。これがどちらかに偏れば、異義になってしまうわけです。

ですから、信じさえすれば念仏など称えなくていいというのも正しい信心ではありませんし、念仏を称えていけばそれでよいというわけでもありません。

どちらかに偏って、一方が否定されてしまうと、それは異義ということになります。

その信心が言葉の形を取ったものが念仏なのです。

ですから信心と念仏は離すことができないもので、念仏が称えられるところには信心があります。

「行」を欠いた「信」も、「信」のない「行」もともに無意味で、「行」が「信」に貫かれ、「信」が「行」に支えられることによって、往生が確実になるのです。

信心と念仏とは、実は一体なのです。これを「信行一体」といいます。

②「弥陀の本願には、老少善悪のひとをえられず、ただ信心を要とすとするべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。」

煩惱：身心を煩わせ、悩ませる精神作用のこと。人々は煩惱によって業を起し、苦の報いを受けて迷いの世界に流転する。貪欲（むさぼり）・瞋恚（怒り）・愚癡（無知、愚かさ）を三毒の煩惱という。衆生：生きとし生けるもの。

（現代語訳）

阿弥陀仏の本願は、老人か若者か、善人が悪人かという区別をされず平等なのです。ただ、阿弥陀仏の本願による救いを信じる心が肝要なのだと思得なければなりません。なぜなら阿弥陀仏の本願は、深く重い罪を持ち、激しく盛んな煩惱を抱えて生きる私たち衆生を救うためにおこされた願いだからです。

無力な衆生が「信」の境地に到達するには、自分にまわりつくエゴとか我、我執、自分中心のはからいをすべて捨て去って、全身全霊を超越的な何ものか、すなわち弥陀に委ねることです。

悪人正機すなわち「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」（善人でさえ浄土に往生することができるのです。まして悪人はいうまでもありません）という言葉が『歎異抄』では後に第三条で出てきますが、阿弥陀如来の本願が目指す対象は、このような悪人の人々だということがここでは述べられています。

悪人というのは、法律に反したり警察のお世話になるような社会的な罪を犯した人のことだと私たちは思いがちですが、ここでは「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」であると述べられています。

これは貪欲・瞋恚・愚癡の煩惱を絶えず起こしては、その結果を受けて苦しみ悩み、もうこりごりだと思いつつもまた同じことを繰り返しては悔んだり悲しんだりすることです。

仏教でいうところの「罪惡」は、法律を犯すような罪惡よりも、「無知」や「無自覚」のことです。言葉や行動よりも、心の中の罪を重要視します。

無自覚で犯す過失、すなわち「自分は何も悪いことはしていない」「自分には罪はない、悪いのは他の人である」と思い込んでいる人間の自信過剰が「罪惡深重」なのです。

それが実は「無自覚」という罪惡の根源であり、これを「無明」といいます。

「無明」は真理に暗く、縁起の道理を知らないことで、あらゆる迷いや煩惱の根源のことです。

「明」は知恵のことです。

そして一番重い罪は「疑い」であり、仏智すなわち仏さまの智慧を疑う罪、そして阿弥陀仏の本願を疑うことです。

③ 「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。」

（現代語訳）

ですから本願を信じる者には、念仏以外のどんな善い行ないも必要ありません。念仏よりもすぐれた善はないからです。また、どんな悪をも恐れることはありません。阿弥陀仏の本願を妨げるほどの悪はないからです。このように親鸞聖人は仰せになりました。

幸せになるためには、普通なら、いいことをしなくてはならないという思いに駆られると思います。

しかしお念仏さえあれば善根功德はいらぬということが、ここでは述べられています。

なぜなら、お念仏が最高の功德であるからです。

宗教というのは時に、道徳や倫理の立場から逸脱し、相容れないことがあります。  
阿弥陀如来の本願は、「善」や「悪」という人間の道徳性や倫理性の問題を超えた次元に成立すると、親鸞聖人は見ておられました。  
この「善・悪」の問題は、一般の人々の常識では理解しがたい部分もありますが、宗教の上では、そうした常識を超える理解が必要なのです。  
これは誤解されやすい部分でもありますが、また追って考えていきたいと思います。

今日はこのくらいにしておきたいと思います。  
次回は第二条を拝読してみたいと思います。